

【桐一葉】きりひとは(その1)

・一葉散るを見て歳の將に暮んとするを知り、瓶中の氷を見て天下の寒きを知る。近きを以て遠きを論ずるなり 『淮南子』説山訓より

『淮南子』(えなんじ)は神話伝説に基づいた道家の影響の強い百科全書。紀元前1世紀、前漢の淮南王劉安の撰です。

桐は初秋、最初に葉を落す落葉樹といわれています。『淮南子』を基に、

・吾桐一葉落ち天下尽く秋を知る(『群芳譜』木譜)

などといわれ、「桐一葉」は微かな現象から大勢をつかむことのたとえを意味します。

桐一葉 は残暑のころに秋の始まりを表す銘として使うべきでしょう。

桐はゴマノハグサ科の落葉高木、中国原産です。日本で一般に桐といえば白桐ですが、中国では梧桐(ゴトウ・青桐)をいうそうです。

何れもかなり大きな葉で、はらはらと散る落葉とは異なり、バサッと音をたてて落ちます。葉の形も落ちる音も決して美しいとは思えないのですが、古来桐は高貴な樹木とされてきました。

これには、何か特別な謂れがあるのでしょうか。

・かの鸕鷀[ゑんすう・鳳凰=靈鳥]は南海を発して、北海に飛ぶ。梧桐にあらざれば止まらず、練実(れんじつ・竹の実)にあらざれば食はず、醴泉[れいせん・美味な水]にあらざれば飲まず。

『莊子』秋水第十七

により

桐は鳳凰が降りる木、即ち高貴な樹木なのです。

鎌倉初期の『飭抄』によれば、天皇の御袍[ほう うへのきぬ 表着]の文様は古くから桐竹文様であったようです。上記『莊子』が根拠となったのでしょう。

桐紋は天皇の紋章となり、功績のあった者に下賜したらしく、さまざまな意匠の桐紋が生まれました。

足利家の紋章もその類であり、さらに義明から信長→秀吉と受け継がれていきました。

『莊子』を根拠に桐と組み合わせられた竹はいつしか略され、別の意味から皇室の紋章となった菊が桐と共に高貴な身分を表す意匠となりました。

下克上の世、武士たちの憧れであった菊桐の意匠は無秩序に増殖していたようです。

15・6世紀と思われる茶器の中に様々な手の菊桐蒔絵が現存していますが、その氾濫状態を物語っているのかもしれない。

秀吉が天正十九年(1591)に出した「菊桐禁止令」は氾濫した菊と桐の權威を新たに秩序立て、自らの紋章にする意図があったようです。

秀吉が自らの家系図を意のままに製作したことも、菊桐を好んだことも、共に家柄コンプレックスに根ざした行為といえましょう。高台寺(秀吉と北政所を祀る寺)に伝わる高台寺蒔絵の菊桐の意匠は豊臣政権下の新たな秩序の象徴であり、以降、菊桐文の典型となり今日に至ります。

その他に茶道具で桐といえば、藤村庸軒好みの凡鳥棗(ぼんちょうなつめ)が知られていますね。大棗の甲に桐文を蒔絵し、鳳凰を暗示した棗です。

利休好み桐文棗を写したものであることですが、本歌の棗に関して私は未確認です。

凡鳥棗の名は庸軒から始まるようです。

後漢の『説文解字』は「鳳は神鳥なり。…鳥に従い、凡の声」と鳳の字を鳥と凡に分解しています。六朝時代の『世説新語』簡傲にも鳳の字を鳥と凡に分ける話があります。

私は庸軒の高弟、山本退庵による写しを拝見したことがありますが、気品に満ちたすばらしい棗でした。

この棗に庸軒の深い漢学の素養を読み取ることができるでしょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~